

八ヶ岳通信

■ 八ヶ岳総合博物館

地域の“知りたい”が集まる場所

博物館に寄せられた相談とレファレンスの取り組み

博物館の役割は、展示室で来館者を迎えることだけではありません。来館者や地域の方々、時には遠方にお住まいの方からも寄せられる、地域に関する疑問や質問にお答えしています。小中学生の夏休みの自由研究、学生や市民の調査・研究、雑誌やテレビ番組制作のための問い合わせなど多岐にわたります。こうした相談に対応する業務を「レファレンス業務」といい、利用者が地域の知識に触れるきっかけを提供する博物館の大切な役割のひとつです。その具体例をいくつかご紹介します。

(質問) 寒天づくりで使われる釘がたくさんついた道具は、何のために使うのか？

(回答) 昔ながらの寒天づくりの工程「釘差し作業」に使われる道具です。寒天は、テングサ・オニクサなどの海藻から煮だした液を固め、生天(トコロテンのこと)を作ります。生天を棒状に切って並べたあと、釘差し作業を行います。冷気が均一に伝わるようにするためです。当館常設展示では、実際に使われた道具をご覧いただくことができます。

参考資料：茅野市教育委員会 編。

常設展示解説：茅野市八ヶ岳総合博物館，茅野市教育委員会，1989.3.



展示されている寒天づくりの道具

(質問) 諏訪国の国府はどこにあったのか。

(回答) 諏訪国は、『続日本紀』によると、諏訪国は養老5(721)年から天平3(731)年までの約10年間存在していました。岡谷市長地の榎垣外遺跡には、官衙(役所)跡とみられる建物跡が見つかり注目されますが、当時の諏訪国は諏訪だけでなく、伊那・筑摩・安曇まで含む広い範囲だったと考えられています。そのため、国府(国の中心となる役所)が実際にどこに置かれていたのかは分かっておらず、諏訪ではなく他の郡にあった可能性もあります。

参考資料：茅野市史 上巻(原始・古代)，茅野市，1986.3/諏訪市史 上巻(原始・古代・中世)，諏訪市，1995.3/岡谷市教育委員会生涯学習課分室 編。榎垣外遺跡(郷土の文化財；21)，岡谷市教育委員会，2000.3.

(質問) 八ヶ岳に以前と比べて高さが変わった山があるのはどうして？

(回答) 南八ヶ岳の横岳(2830m)は、現地測量による改訂で平成31(2019)年4月に標高が1m高くなりました。また、蓼科山(2531m)と峰の松目(2568m)は、平成26(2014)年の三角点標高の見直しにより、それぞれ1m高くなっています。こうした標高の改定は、山が急激に盛り上がったといったような物理的な変化ではなく、新しい技術の導入やより正確な基準に合わせて値が調整された結果、更新されているものです。常設展示の地質模型を見ながら、確かめてみませんか。

参考資料：国土地理院ホームページ「日本の山岳標高1003山」

<https://www.gsi.go.jp/kihonjohochousa/kihonjohochousa41139.html>
(2026.3.1閲覧)

ほかにも「こんな石を見つけたけれど何だろう?」「この植物の名前を知りたい」といった相談や、鳥や昆虫、星・天体などに関する質問もたくさん寄せられます。必要に応じて、地域の専門家や市民研究員、他地域の博物館や大学など博物館が持つ知のネットワークを活かしてお答えしています。今はインターネットで多くのことを調べられる時代ですが、「調べ方がわからない」「地域に根ざした確かな情報がほしい」というときに頼ってもらえる存在として、皆さんの“知りたい”に寄り添う博物館を目指しています。

つなぐ美術展 関連イベント はじめまして! 赤ちゃんとお美術鑑賞

茅野市美術館は2025年で開館45周年、茅野市民館内に移転して20周年を迎えました。市民とともに歩んできた節目に開催する展示として、2025年8月7日(木)～8月31日(日)に「つなぐ美術展」を開催しました。

本展は、美術館サポーターが学芸員とともにワークショップ形式で内容の検討を進めた、2つの展示で構成されました。一つは、当館の収蔵作品からテーマ決めや選定をサポートが担当した「茅野市美術館サポーターがつなぐ みんなの収蔵作品展」。もう一つは、鑑賞者参加型の運営方法を検討した公募展「メイメイアートvol.4 出会うみようと名付けてみよう 展覧会」です。そして、「つなぐ美術展」の関連イベントとして、3～12か月の赤ちゃんとその保護者を対象に「はじめまして! 赤ちゃんとお美術鑑賞」を8月11日(月・祝)に実施しました。

近年、全国の様々な美術館で赤ちゃんと一緒に作品鑑賞するプログラムが行なわれ、赤ちゃんとお美術館の関係に注目が集まっており、本プログラムは、市民サポーターより2020年度の主催事業案として、提案されたものでした。



打合せの様子

そこから新型コロナウイルス感染症の流行を経て、2024年度茅野市美術館主催事業「アートで地域をサポートしませんか#4 美術館編」第3回特別講座にて、赤ちゃんとお美術鑑賞の研究・実践を行なっている杉浦幸子氏(武蔵野美術大学芸術文化学科教授)を招いた講座が始まりとなって、実



彫刻作品を鑑賞

現に向けて打合せを重ねました。本番前日には、展覧会会場をスタッフ全員で周り、当日の流れや注意事項、展示作品の確認を行いました。



触ることができる作品は触って鑑賞

初の試みということもあり「興味を持ってくれるご家族はいるだろうか」という不安もありましたが、結果的に茅野市、諏訪市、岡谷市、東京都から5組16名の皆さまにご参加いただきました。当日は、美術館サポーターや諏訪地域の学芸員がスタッフとして加わり、1組につき3～4名体制で寄り添いながら展示室を回りました。

手足をパタパタと動かしたり、作品や天井、窓の外の風景をじっと見つめたり、かわいらしい「喃語(なんご)」を発したり……。赤ちゃんによって関心を持つ対象が全く異なることに改めて気づくひとときとなりました。



作品をじっと見つめる姿

赤ちゃんはもちろん、保護者の皆さまが鑑賞を楽しむ姿、そして周囲の鑑賞者とその様子を温かく見守る光景が印象的でした。

関わったスタッフからは「赤ちゃんが興味を持っていろいろな作品を見ていた」「スタッフの顔を見て笑顔になった」「自分も緊張していたが、保護者の方がフランクに話してくださった」「じっと飽きずに作品を見ていたり、外光や照明なども見ていた」といった感想がありました。

参加者のアンケートには、「普段の生活からは知らなかった子どもの一面を見れた」「個人で行くよりもチームで見ると感じるが多かった」「赤ちゃんOK!とはいえ、親子だけでは不安だったのでサポーターの方に説明など助けていただけて一緒に楽しむことができた」「子どもの興味のあるものを知ることができた」「スタッフさんがよく話しかけ、気遣ってくださったので安心して楽しむことができた」といった声が寄せられました。

今後の継続に向けた確かな第一歩を踏み出すことができました。

守矢文書にみる武田勝頼と諏訪

令和7(2025)年4月26日から6月29日まで、企画展「武田勝頼の時代の古文書」を開催しました。

武田勝頼は、天文15(1546)年に、武田信玄と諏方頼重娘(諏訪御料人)の子として生まれました。諏方家の名跡を継ぐ予定だったとみられ、「諏方四郎勝頼」を名乗り、信玄から高遠城主を任されていました。永禄8(1565)年に武田家嫡子である武田義信が廃嫡されると勝頼が跡継ぎとなり、元亀4(1573)年に信玄が病死したため、家督を相続しました。

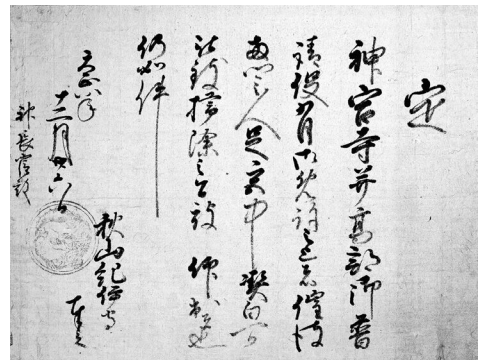
守矢史料館には、勝頼に関係する古文書が11点あります。勝頼の書状1点の他は、当時の諏訪郡代が出した文書です。このうち、天正6(1578)年作成の史料「上諏方大宮同前宮瑞籬外垣造宮帳」は、瑞垣・外垣の造営を負担する村々が記録されています。

天正6年は寅年で、御柱祭が行われました。この時の瑞垣・外垣の造営費用を徴収する人物として、造宮帳には「秋山宮内丞」、高遠衆の「保科美濃守」「保科筑前守」「金子新五右衛門尉」「矢澤和泉守」「秋山備後守」の名がみえます。「秋山宮内丞」は「秋山紀伊守」の可能性があり、天正8(1580)年に作成された御柱に関する文書の奉者は秋山紀伊守でした。秋山は勝頼の高遠時代からの

側近と考えられ、天正10(1582)年に勝頼が織田信長により自害したときには、運命を共にしました。

また、天正6年の御柱祭では、勝頼の後ろ盾で、諏訪上下社の社殿がすべて建て替えられました。古代においては、御柱毎に、信濃国中で社殿の建て替えを行なったといいますが、中世以降は、宝殿以外の建て替えは行っていなかったと考えられます。すべての社殿の建て替えを実行したことや、造宮帳に高遠時代からの側近と考えられる人物が名を連ねているところをみると、勝頼はこの時の御柱祭をかなり重要視していたのではないかと思います。

当館では他に企画展「守矢家の書」(8月9日~10月3日)、「古墳の茅野」(10月4日~12月19日)、「午年の古文書」(12月20日~令和8年2月23日)を開催しました。



天正8(1580)年12月26日「武田家文書」(長野県宝)

国宝「土偶」(縄文のビーナス) 国宝指定30周年

縄文時代の国宝第1号である縄文のビーナスが国宝に指定されたのは平成7(1995)年のこと。令和7(2025)年は30周年の年でした。この間、火焰型土器(新潟県)、中空土偶(北海道)、合掌土偶(青森県)、縄文の女神(山形県)、そして仮面の女神が国宝に指定されてきました。

この縄文のビーナスの国宝指定を記念して、考古館ではさまざまな記念イベントを開催しました。まず皮切りに6月15日(日)に指定当時文化庁の調査官だった原田昌幸氏と当館の守矢特別館長との対談を開催しました。9月6日から11月3日には記念展「あの土偶この土偶 写真とレプリカで見るさまざまな土偶」を開催しました。全国の土偶の写真と国宝土偶をはじめとする当館所蔵のレプリカをすべて展示し、大小さまざまな土偶と縄文のビーナスを色んな報告からの視点で比較しながら見ていただきました。年が明けて1月25日(日)には記念シンポジウム「尖石縄文文化賞受賞者と語る『土偶とは何か?』」を開催しました。シンポジウムには、三上徹也、瀬口眞司、阿部昭典、

藤森英二、佐賀桃子、会田進の各氏がパネリストとなり、土偶についての自身の考えと取り組むべき研究についてお話しいただきました。

対談には58人、記念展の会期中の入館者数は1万1,590人、シンポジウムは152人の入場・来館がありました。これからも2体の国宝を中心に縄文文化遺産をしっかりと継承してその価値を伝えていこうにしたいと思います。



シンポジウムのようす
(上段左から三上徹也、藤森英二、瀬口眞司の各氏、
下段左から佐賀桃子、阿部昭典、会田進の各氏)

令和7年度 新指定の文化財

令和7年度は、以下の3件の文化財を新たに市指定文化財としました。

- ・中ツ原遺跡(茅野市指定史跡)
- ・永明寺山古墳(茅野市指定史跡)
- ・永明寺山古墳出土遺物(茅野市指定有形文化財)

中ツ原遺跡は、国宝土偶「仮面の女神」が出土した遺跡です。茅野市湖東山口地区にあり、平成4・11～13年度の圃場整備事業に伴い発掘調査が行われました。調査の結果、縄文時代中期から後期の住居址が200軒以上、3300余の柱穴・墓穴・黒曜石貯蔵跡が発見されました。大量の土器・石器とともに、翡翠や琥珀などの玉類、土偶が出土しています。「仮面の女神」は大きさや造形の優秀さとともに、墓穴から出土した副葬品である点も注目され、同様に墓穴から発見された土器8点とともに縄文時代後期の墓制をうかがえる貴重な資料であるところから、平成12年に国宝に指定されました。

土偶が出土した一帯を中心に平成14年度に「中ツ原縄文公園」として整備・保存を行いました。後期の遺構を色のついたアスファルトで表示し、大きな方形柱穴列に8本の柱を立てました。また、土偶が出土した墓穴と周辺の墓穴は、露出した展示として保存し、現地で土偶の出土状況を見学できるようになっています。

永明寺山古墳は、平成25年の永明寺山公園墓地の造成に伴って発掘調査が行われました。茅野市塚原永明寺山山腹にあります。墳丘の上部が削平されていましたが、墳丘、石室、外護列石などが残っていました。石室は片袖式で、玄室部分の規模は、横幅が入口部で1.6m、奥壁部で1.8m、奥行き5.2m。羨道の規模は長さ2m、幅1.2mです。石室底面に石敷は確認されませんでした。墳丘は高さ3.5m、直径約10mの規模です。出土遺物や古墳の形態から7世紀の古墳であることがわかりました。調査後、墳丘の復元を行い、現在見学できるようになっています。状態もよく、石室底面に石敷がないといった地方的な要素があるところから、文化財指定を行いました。

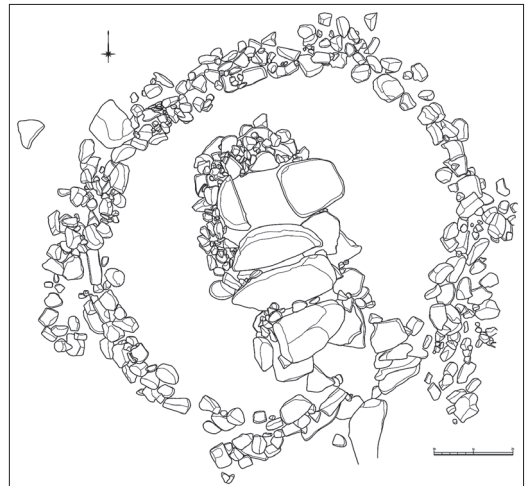
永明寺山古墳出土遺物は、上記古墳発掘時に出土した資料群です。土師器・須恵器といった食膳具のほか、銀象嵌装飾の施された鍔を持つ大刀や、多くの鉄鏃・馬具、玉類が出土しています。武具類が多いところから、武人的性格をもつ被葬者ではないかと考えられます。出土遺物の時期差から複数人の埋葬が行われたと考えられます。各遺物の出土位置、状況が記録することができた、市内では希少な例です。出土遺物のうち251点を指定しました。



上空から見た中ツ原遺跡



永明寺山古墳 写真



永明寺山古墳 平面図



永明寺山古墳出土遺物

茅野市の博物館・文化財だより **八ヶ岳通信** No.44 発行年月日 令和8年3月31日

編集・発行	茅野市尖石縄文考古館	〒391-0213	茅野市豊平	4734-132	TEL(0266)76-2270
	茅野市神長官守矢史料館	〒391-0013	茅野市宮川	389 番地の1	TEL(0266)73-7567
	茅野市八ヶ岳総合博物館	〒391-0213	茅野市豊平	6983 番地	TEL(0266)73-0300
	茅野市美術館	〒391-0002	茅野市塚原	1-1-1	TEL(0266)82-8222
	文化財課文化財係	〒391-0213	茅野市豊平	4734-132	TEL(0266)76-2386



八ヶ岳通信
バックナンバー